

Title	『人間喜劇』の「序」をめぐって：バルザックとロマン主義管見
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 1990, 29, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7017
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『人間喜劇』の「序」をめぐる

——バルザックとロマン主義管見——

柏 木 隆 雄

1

1830年12月9日の *Caricature* 紙に Alfred Coudreux という匿名で、『浪漫的連禱』*Les Litanies romantiques* と題された小文が載った。これは文学のパトロンを自認するブルジョワが、サロンに出入りするようになった駆け出しの詩人に、自作を朗読して聞かせ、招かれた連中の大仰な褒め言葉に続いて、詩人が皮肉な一矢を報いて去るという、たわいもない記事である。しかし、それが戯文であるだけに、折しも全盛の〈romantique〉の本質を自ずと浮き彫りにするようだ。とりわけ興味深いのは、その才人ぶったブルジョワが、ひとわたりロマンチックの作家たちを論評したあとで読む *Croquis* なる代物で、それは、

いずれと判らぬ声がある… 微かで、重々しく、はっきりとして、豊かで、陰鬱だ。模糊としたハーモニー、さながら田園に広がっていく鐘の音のよう、朝まだき春の日曜日、青空のもと、若葉の茂み越しに。それから白い物影、美しい髪、花々。

と冒頭から、対話ともモノローグともつかぬ、それこそ「いずれと判らぬ声」*des voix confuses* そのままに始まり、さらに

無邪気な笑い。何思うこともない、疲れを知らぬ戯れ… 泉の辺りに建てられた粘土の城、白や緑、黄色や赤の小石が水に集まっている… 水！裸足の足の辺りでふるえている。何もないのに、涙が潑刺とした目を潤ませる… 「死」がすくと立ち上がって白い骨をかたかた鳴らし、瞳のない眼窩、唇の失せた歯を見せる。そして日の光りがその黒い肋骨を抜けていく。「死」は母も、祖母も、乳母も攫っていく⁽¹⁾。

と続く。これを読めば、脈絡がうまく辿れぬのはともかく、そこに所謂ロマンチックな要

(1) *Œuvres complètes de M. de Balzac*, tome XXVI, p. 43, Les bibliophiles de l'originale, 1976.

素がふんだんに盛り込まれていることは明らかである。第一行に示された形容詞をはじめ、そこに使用されている小道具、「ハーモニー」や、「鐘」、また「城」、「泉」、「涙」など、Mussetの『デュピュイとコトネの手紙』*Lettres du Dupuis et Cotonet* (1836)で「ロマンチスム、それは、涙を流す星、すすり泣く風、戦き震える夜だ。舞立つ花、香気昇る小鳥だ。(略)天使や真珠、柳の真っ白のドレス、ああ、つまり美しいものことなのです！⁽²⁾」とあるとおりロマンチックに欠かせぬ要素である。『浪漫的連禱』のさらなる眩きをいま少し引く。

お百姓だよ、着物が黒いのだ… ヒナゲシがお墓に咲いている。まあ、綺麗な花… 好き、少し、沢山、うんと… 男の思想だ。孤児で… 書物や研究！ 勉強だ、過去、現在、法律、宗教、善、悪を。人間は32の脊椎を持つ。百合は百合科である。大洪水があった。地獄はあるのだろうか？⁽³⁾

ここでも「墓」とか「孤児」とかロマン派好みの語が用いられ、また、「過去」「現在」の時間意識、「宗教」「善」「悪」の詮議もある。パラグラフが変っても、なお一層〈ロマンチック〉な要素が振りまかれ、訳のわからぬ対話の様な、眩きような言葉が相変わらず続くのである。それは、ミュッセの「田舎では、〈romantique〉という言葉は、一般に意味が簡単にわかる。〈absurde〉と同義語なのである」の言葉どおり⁽⁴⁾、absurdeな展開で、『浪漫的連禱』の題名の揶揄もなるほどと頷かれる。

じつは、これはバルザックが名を変えて書いた戯文なのである。バルザックの数ある文章を措いて、片々たる、雑誌匿名記事をわざわざ取り上げたのは、ほかでもない、1830年における匿名のこの戯文が、〈romantique〉を揶揄するものでありながら、同時に〈romantique〉に対する彼の文学的心象をも自ずから表すようにも読み得るからである。戯文のテキストを虚心に読み、さらにその空隙を様々な言葉で補ってみると、それと重なるものがバルザック後年のテキストに見えてくるのだ。すなわち、『人間喜劇』の序文。

2

駆け出しの青年作家の際物めいた戯文と、『人間喜劇』全巻の巻頭を飾る「序」を並べて論じるのはいかにも不釣り合いで、それこそ〈absurde〉であろう。しかし、『人間喜劇』のプランの胚胎する経過を語ってバルザックはこう書いている。

(2) A. de Musset, *Œuvres complètes*, tome 9, p. 216. Charpentier, 1884.

(3) *Op. cit.*, p. 43.

(4) *Op. cit.*, p. 201.

『人間喜劇』の着想は、始めは私にとっては、ひとつの夢のような、ちょうど温めてはいるが、立ち消えてしまうにまかせるあの出来そうにない目論見のひとつのようであった。一つの夢想であって、微笑みかけ、女性の面影を示しては、たちまちその翼をひろげて、幻想的な空へと舞い上がっていくものであった⁽⁵⁾。

この実に詩的な、或いは個人的な感慨を盛り込むイマージュは、『浪漫的連禱』第二パラグラフの「一人の女が欲望のように美しく現れる。瑞々しい花のように若やいで花開く」という文章と重なりはしないか。しかもその「夢想」が「あれこれと指図して、猛威を振るうに至って、従わざるをえなくなるのである」という次のくだりは『浪漫的連禱』の「胸の大きな嵐」という表現と呼応する。“rêve”を始め、“impossible”, “s’envoler”, “chimère”, “remontant”, “ciel fantastique”などが連続して使用され、非現実的なイマージュを与える「序」のこの書き出しは、少なくとも社会体系の見取図という看板の客観性にもかかわらず極めて「ロマンチック」である。

しかし『浪漫的連禱』と「序」とを結びつけるのはそればかりではない。「夢想」chimèreが「現実」réalitéに変じ、それに従わざるを得なくなる、というのは、もとより、夢が現実になったという隠喩にほかならないが、『浪漫的連禱』にいう「人間は32の脊椎を持つ」という博物学的用語とはるかに呼応して、chimèreの語源、キマイラの、頭が獅子、胴が山羊、尾が龍という「獣性」(animalité)の連想作用をも伴う⁽⁶⁾。つまりそれはバルザックがその次に提出する、「(人性) Humanité と (獣性) Animalité との比較」という『人間喜劇』の大命題を見事に導入するのである。

自己の作品を集大成する総題を『人間喜劇』*La Comédie humaine* とする限りは、当然『神曲』*Divina Comedia* の〈divin〉と相応ずる〈humain〉の語の詮索が必要となる。あたかも1830年の戯文『浪漫的連禱』において、始めの典型的？ロマンチックの叙情的自然描写に続いて「男の思想だ」以下、「書物や研究！ 勉強だ」、さらに先に引いた「人間は32の脊椎を持つ。百合はゆり科である」という言葉に示される科学性の裏付けといったもう一つのロマンチックの要素を揶揄的ではあっても持ち出して来るのは偶然の暗合であろうか。

「序」文の展開は、キュヴィエとジョフロワ・サンチレールの「進化論争」をめぐるの18世紀的科学思想・知識、博物学者の学説の列挙によって、まさしく「書物や研究！」*des livres, des études!* を示している。先の戯文にある「人間は32の脊椎を持つ」と

(5) Balzac, *la Comédie humaine*, tome I, p. 7, éd. Pléiade, 1976. 以下引用はこの版で、いちいち頁を明記しない。

(6) 1835年版アカデミーの辞書のchimèreの説明にはまず“Monstre fabuleux, ayant le devant d’un lion, le milieu d’une chèvre, le derrière d’un dragon”とある。

いったパロディめいた命題が、ここでは「単一組成」l'unité de composition になり「入れ子構造」l'emboîtement という堂々たる本物の科学論議となっているのである。

しかし、さらに興味深い事実は、隣国のゲーテまでを巻き込んだキュヴィエとジョフロワ・サンチレールの「進化論争」が、1830年2月22日、即ち戯文『浪漫的連禱』執筆と同年であったことであろう⁽⁷⁾。「序」の冒頭、「思いついてからやがて13年にもなる」と、読者に13年前、即ち1830年前後の時代に遡らせ、しかも、論争の主演キュヴィエ、ジョフロワ・サンチレールいずれもが、動物の化石、骨格の研究者であることは、古代の怪物キマイラの暗合もさることながら、「白い骨をかたかた鳴らし、瞳のない眼窩、唇の失せた歯を見せる。そして日の光りがその黒い肋骨を抜けていく」とか「人は32の脊椎を持つ」という『浪漫的連禱』の記事との連関を考えてみたくなる。

「序」において「単一組成」の議論から生物界の法則へと展望を進めたバルザックはさらに人間の多様性に言及する。つまり自然界が人間界すなわち社会と相似すると言うのである。動物界と人間界のまことに巧みな組合せは、動物を語って人間に及び、そしてビュフォンの所説を再び引き、そこから、動物論、人間論へと進んで、また更にビュフォンに帰るといふ、いわば螺旋的論理が用いられている。

ビュフォンは、動物界においてはその生が極度に単純であることを発見した。動物は家具などもってはいない。芸術もなければ科学もない。ところが人間は、ある法則、これはこれから探さねばならぬが、それによって、自己の風習、風俗、思想、さらにはその生活まで、自分の必要に合わせて調達したあらゆるものの中に表現しようとする傾向がある。

最初、動物の全体的な種族論であったのが、次第に的が絞られて、その種族の境界の人間社会との比較、更に、その生活形態へと、具体的に、そして本来の主題である人間の風俗、言語へ議論が展開する。当時一流の科学者の言を梃子に、動物の習俗が極めて intéressant であることを強調した挙げ句に、そうした興味深いはずの習俗も、実は、人間社会のそれに較べれば、寧ろ平凡極まりないもので、人間社会を描いていく興味の方が、はるかに重大であることを主張するのである。

かくて、これから仕上げようとする作品は、三つの形を取るに至った。すなわち、男と女、それから事物、言い換えれば、登場人物と彼らが自己の思想について示そうとする物質的表徴である。つまり、人間とその生ということになる。

(7) Goethe, *Les Naturalistes français*, in *Paris ou le livre des Cent-et-un*, tome 5, Ladvocat, 1832, pp. 243-266.

こうして動物学上の分類やら、その習俗、及びそれらに関するアカデミックな議論のあげつらい、それらは、いずれもこの「男と女、事物」les hommes, les femmes et les choses という極めて明快、単純な命題を引き出す戦略的言辞にほかならず、動物学、自然生態学に対して構想された体系は当然、従来の人間学、社会学である歴史を標的とするようになる。

こういう議論の進め方は、それこそ『浪漫的連禱』の「書物、研究！」に続く「学ぼう、過去を、現在を」と書かれたそのままではないか。いかに『人間喜劇』の「序」がその秩序、すなわち「法律、宗教、善、悪」という item に従って進んでいくか、以下に検証しよう。

3

バルザックは「歴史」の書き手が「あらゆる時代において我々に風俗の歴史を与えるのを忘れて」と批判する⁽⁸⁾。バルザックのいう歴史は「一個の社会が示す登場人物の興味あるドラマ、心を捉えるようなイマージュのもとに詩情と哲学を見たいと思っている詩人にも哲学者にも、さらに大衆をも同時に喜ばせるような」ものであった。そこでウォルター・スコットが登場する。

ウォルター・スコット、この現代の吟遊詩人は、その頃巨大な足跡を創作の一分野に印していたが、その分野は不当にも二流だとされていたのだ。

ウォルター・スコットへの言及、さらに、文学作品の主人公達の列挙は、それまでの科学者、生態学者、博物学者の列挙のあとだけに、それらの人物たちさえ、実在の、社会構成員かと疑わせる程に、実に効果的である。それは、これまでに説いていた高級な「歴史」、古代ギリシャやローマの詳細な事実の秩序だった記述のみのものではない。沢山の登場人物を一つのある時代の、ある一定した空間に活躍させ、その人物たちの織りなすドラマと、歴史が彼らの背後から浮かび上がってくるという小説世界、それは確かに従来の一人、二人の英雄、美姫の活躍する物語とは一線を画するものであった。

スコットの名に続いて、従来ロマンスの登場人物が列挙されることによって、過去のヒーローたちは新しい文学世界のなかに新しい生命を帯び、しかも、先程まで述べ来た多くの学者達の名前の羅列から出来上がった18世紀的世界、知の世界から、19世紀的世界、

(8) E. Brua は J. -A. Dulaure (1755-1835) なる歴史家の *Singularités historiques* というエッセーにバルザックの発言と似通う表現を見出して、その影響関係を示唆している。E. Brua, "Balzac lecteur de J. -A. Dulaure?" in *l'Année balzacienne* 1974.

ロマンチックの世界への移動が見事に果たされるのである。これらの人々が、現に生息すると想像して、その社会構成を明らかにする l'Etat-civil を打ち立てるのはリアリストというよりまさしく空想的な、それこそロマンチックな思想であろう。

多産は、バルザックの卓れて大きな特徴でもあるが、それはスコットの豊穡さを出発点とする⁽⁹⁾。しかしスコットの世界は中世スコットランド、イングランドの、いわば現代と関わりのない、まさしく狂言綺語、ロマンスの世界であった。バルザックの発見は、歴史というものを、過去の静的なものにせず、極めて動的な、従って現に目の前にある事象すらも、「歴史」の対象となることを知ったことであろう。過去の記録や、過去の事実を丹念に記述しても、それは歴史ではない。歴史はそれを構成する人間の細かい観察、研究によって、初めて意味のあるものとなるのである。「歴史の一章が一つの小説となり、その小説が時代となる」というバルザックの言葉は、小説の社会的意義を宣言するものである。「その社会の秘書、祐筆」の言はそこから出てくる。社会を忠実に、しっかりと見据えて筆にすれば、その作り出す世界は、当然 fécond なものになるだろう。それを実行するにはどうするか。バルザックはこう続ける。

悪徳と美德との資産目録を立て、様々な情念が作り出した主なものを集め、「社会」の主な事件を選び、同種からなる数種の性格の特徴をまとめあげて様々な人間の型を組立てていくことで、恐らく私は、あまりに多くの歴史家たちから忘れられている歴史、風俗のそれを書き上げるに至ることができたように思うのだ。

歴史の叙述、即ち「過去」と「現在」の叙述から、「善」と「悪」の叙述へ。『浪漫的連禱』に記された item にあたかも相応ずるように「美德」と「悪徳」の財産目録を作り上げるといふ展開になっているのである。同種の caractères から types を組み立てていくというのは、ビュフォンを始めとする博物学者の業績を踏まえての、いわゆる種とタイプという人間学の標本作り、そうした種とタイプによって出来上がっている人間界の有り様を叙述すること、それがこれまでに書かれなかった、風俗の歴史（物語）Histoire des mœurs の成就なのである。

歴史から物語的歴史へと展開し、歴史とフィクションの世界を巧みに混交させながら、歴史叙述にかわる小説の価値を明らかにしたバルザックはさらに「こういう社会的な結果が起こりえた色々の理由あるいはある大きな一つの理由を検討せずにはおられなかったし、またこの巨大な人物たちや、情念や出来事の集合体の中に隠された意味を読み取らないではすまなかった。」

(9) Balzac が Scott を知ったのは21才、1820年のことで、1821年7月の手紙で彼の *Kenilworth* を la plus belle chose du monde と感嘆している。

様々な人物、情念、事件の中に、moteur socialを探り、そこに「永遠の法則」の何たるかを明らかにする。そしてそれらの原因が明らかになれば、その結果、到達しうる結論を求めずにはいない。これは、やがて詳しく述べられるように、『人間喜劇』全体の基本的原理を示すものである。しかも principes naturels を méditer する、という表現で、自然界の諸原則の発見者との暗黙の繋がりを仄めかしながら、そのすぐ後に Sociétés と大文字で書く複数形の「社会」を続けることによって、バルザックは動物界の秩序をも含めた、人性、獣性、いずれもが相い合う、しかも、その秩序に従って出来る各層の重なり合う様さえ髣髴させるのである。

4

本来、社会の動きということを考えるなら、何よりもその社会の牽引車たる、統治者を含めた政治家の役割が問題となる。しかしバルザックは政治家たちよりも、作家の方がむしろ卓れた存在であると主張する。人間現象のあらゆる面に亘って、根本的な哲理を理解し、民衆を教化することにおいて、作家は政治家たちよりも、上に位置するのである。ここから彼の議論は「社会」における政治、選挙制度、法律、宗教へと広がっていく。まさしく『浪漫的連禱』にいう「法律、宗教、善、悪」の展開となるのである。

宗教団体による教示、というより教育は、したがって様々な民衆にとっての生きていく大いなる原理であり社会全体における悪の総和を減じ、善を増加させる唯一の手段である。様々な悪、様々な善の原理である思想は、ただ宗教によってしか用意されえず、屈伏されえず、導かれえない。そういう意味で唯一の宗教はキリスト教である。キリスト教は近代の諸民族を創造し、彼らを今後も維持していくであろう。そうなるとおそらく王政の原理が必要となってくるだろう。カトリシズムと王権とは二つの相離れざる双子の如き原理である。

この最後のフレーズはそのままボナルドの祖述である⁽¹⁰⁾。無知な大衆をキリスト教の教義を通じ、あるいはその教義に則った教育を施すことによって悪の道から護り、善へと

(10) Balzac はその政治、宗教両面で Bonald (Louis, vicomte de, 1754-1840) に共感を示している。Bonald の著述活動は寧ろ 1810年代でこれを今更に持ち出すのは、Bonald の死が 1840年 11月 23日、この序文執筆にそれほど遠くない最近であったこともあろう。Roger Pierrot は Balzac がおそらく Bonald の死を契機として、再び彼の著作を取上げ、再読吟味したに違いないと推測し、Fargeaud 女史は、Bonald の死によって空いたアカデミー・フランセーズの椅子を狙った Balzac が、その準備のために講読したのであろうと推測している。

導いていくというのは、極めて保守的エリート主義と言え言えるし、それは、王政支持の姿勢と勿論重なっていくものである。その意味でもバルザックはこの1840年代、却って1820年代のロマン主義の思想を依然として固持しているように見える。そしてバルザックは例の有名な文学的テーゼ「私は二つの永遠の真理の光りに照らされて物を書いている。すなわち宗教と王政」を掲げるのである⁽¹¹⁾。

この極めて有名なテーゼは、じつは先に引いたミュッセの『デュピュイとコトネの手紙』の中にも殆どそのままの言葉遣いで記されている。

この二つの偉大な言葉、宗教と王政はかつて全能であった。それらだけで、成功もし、財もなせ、名譽を得ることができた。それがなければ世間では相手にされないか、忘却されるか、さもなければ迫害だ⁽¹²⁾。

ミュッセのこの言は、むしろ Restoration の時代について言ったものであった。バルザックのテーゼは殆どこれとそっくりである。これから来たものであるのかどうか、あるいはそれほどありきたりなテーゼであったからであろうか。しかし少なくともバルザックが、ある意味では時代錯誤のこのテーゼを堂々と開陳しているところに、実はバルザックの面目があるように思われる。

バルザックはさらに「法律」の直接的な現象としての選挙制度を非難し、政治的な発言をしたあとで次のように続ける。

ある人々はこういう宣言に何か尊大で、高慢なものを見出すこともあろう。小説家に対して歴史家の顔をしたのかとって喧嘩をふっかけ、その政治的姿勢を問うであろう。私は一つの義務に従うまでである。それが一切の返答だ。私が企てた作品は歴

(11) *l'Avant-propos* と同じ年の8月10日 Balzac の個人雑誌 *Revue parisienne* に載せた *Lettre sur la littérature (sur Sainte-Beuve)* には「二つは互いに相支えている。カトリシズムがなければ、法はその効力を発揮できない。そのことは今日を見れば明らかである。私は声を大にして言う、私は神を大衆よりも愛すと。しかしこの世では王の絶対的支配のもとでは生きることができない。…」と述べ、同じ1842年7月12日の *Hanska* に宛てた手紙ではこう言っている。「政治的に言えば、私はカトリック側ですし、ボシュエやボナルドの側です。そこからそれることは決してありません。しかし神の前では、聖ヨハネ、神秘教会の側です。真の教義を守って唯一のものだからです。これが私の本音です。いずれ、時が立てば、私の試みた作品がいかに深くカトリックで王政支持であるか判って貰えるでしょう。」

(12) *Op. cit.*, p. 218.

史の持つ寿命を保つであろう、私はその歴史の理由、いまなおそれは隠されてはいるけれども、また諸原理や道徳をそれに負っているのである。

Historien と Romancier, あるいは Histoire と Roman と行ってよい、この二つはバルザックにとって、極めて意味深長な概念であって、すでに、歴史に関する彼の意見は述べられており、そこから派生して、こういう現実の政治という問題に立ち至ったのである。彼は先に述べた、政治家よりも、Ecrivainの方が、遥かに人類の歴史において果たす役割が大きい、ということのを再び強調するように論題を戻してくる。バルザックは自己の作品の、歴史と同じほど、その歴史のある限り、生き永らえるという確固とした信念を、芸術家としての信念をここで披瀝しているのである。夜郎自大の誇張が多少混じっているにしても、彼のこの一節は、その芸術家魂を率直に表したもので、彼はここでいわゆる従来の歴史叙述をも包含した総合的な新しい œuvre を宣言しているものと言えよう。そして、議論は再び、作家論、作家の raison-d'être へと巧みに導かれ、『人間喜劇』全巻の構成と、各情景、各研究の抱負と意義が詳しく述べられて結びとなる。

5

1842年の『人間喜劇』の「序」を、その議論の展開に従ってその主なる部分を読み、その基本的な骨格がバルザックの青年時代、ロマン主義隆盛を擲う戯文『浪漫的連禱』とに類するか、二つのテキストを並べながら検討してみた。もとより署名さえも憚った質、量ともに取るに足らぬ戯文に過大の評価を与えて、彼が心血を注いだ（苦勞したことはハンスカ夫人に宛てた手紙が示している）『人間喜劇』の「序」と拮抗させるのは、もう少し慎重であらねばならないだろう。また言葉の単なる羅列、遊戯にしか過ぎないようなものに、過度の意味付けを強いて、「序」の文言に整合させたかも知れない。しかし、「序」の文章を出版者から依頼されたとき、彼が先ず第一に指名したのが、1820年代のロマンチックの総帥 Charles Nodier (1780-1844) であってみれば、この「序」と『浪漫的連禱』を結ぶ糸は必ずしも細いとは言えないように思われるのである。

『人間喜劇』の「序」が、少なくとも骨格的に初期のバルザックのロマン主義擲論の文章に似通うものが見出されることは、たとえ、それが偶然、あるいは無意識のものであったにせよ、十年を超える創作期間において、彼のロマン主義に対するアンビヴァレントな心情の醸成を映すものではないのか。ロマン主義を超えようとして、なお、その根本にロマン主義の最も本質的なものを保ち続けていたためではなかったか¹³⁾。

(13) ボードレールがバルザックを「最もロマンチック」だと記した『1846年のサロン』が発表されたのと同じ年の10月25日、*La Presse* 紙上に『人間喜劇』の「序」が掲載されたことは興味深い事実である。1842年に発表された「序」を再び、『人間喜劇』全

卷の宣伝、広告のためではあろうが、より多くの読者を見込める新聞紙上に掲載するのは、そこになんらかの文学的意図、文学的マニフェストの意図を付度したくなる。

『1846年のサロン』においてボードレーはロマン主義を定義して、「主題の選択の裡にあるのでもなければ、正確な真実の裡にあるのでもなくて、感じ方の裡にあるのだ。彼らはロマン主義を外部に探し求めたが、それを見出すことが可能であったのはただ内部においてのみなのだ。」と言い、「従って、何よりもまず、過去の芸術家たちがないがしろにしたか、あるいは知ることのなかった自然の諸相や人間の諸状況を知ることが肝要である。」と述べていることは、バルザックの『人間喜劇』の趣旨と通ずるものがある。Baudelaire, *Œuvres complètes*, éd. Seuil, 1968, p. 230.